癌と闘い「生きるとは何か」を問い続けて!

訪問日　平成19年8月6日
（喬木村のアトリエにてインタビュー）
訪問者　地方事務所長　田山　重晴
商工観光課長　岡沢　正明
地域政策課　　小島　伸一

小池　誠氏

第7回国際アビリンピック大会に出場されポスターデザインの部門において特別賞を受賞されました。

田山：小池さんは大病をなされ、病気と闘いながら、すばらしい絵を描き続けていらっしゃるとお聞きしましてお話を伺いにまいりました。また今度は国際アビリンピックに日本代表として出場されるとお聞きしました。おめでとうございます。今日は小池さんが癌と闘いながらも画家として活躍され、ご自分の世界を確立されるまでの経過や、癌という究極の病気との闘病で長い間ご苦労なさったことなどをお聞きしたいと思います。お生まれはここ（喬木村）ですか。

−発病、そして闘病−

小池：隣にある大きな塀のある家、そこが私の実家です。小学生の頃の私は外で遊ぶのが大好きな子どもでしたね。学校に朝一番に行って、登校してくる仲間に窓から手を振るような活発な子どもでした。
しかし、物心がついてから急に物を作る事が好きになりました。私の母方のおじいちゃんが趣味で絵を描いていたこともあって、やっぱり血ですね。遠くは小洲（日本画家　大平小洲）の血を引いているそうです。母も絵が好きでしたが　、何しろ嫁ぎ先が農家でしたから、忙しくて絵を描いているようなそんな時間はありませんでした。父は大変に厳しい人で「次男・三男は成人したら家から出ていくもの」として育てられました。私は三男ですから高校を卒業したら「家を出ていくもの」と普通に思っていました。
だから高校を卒業した時に親に「お世話になりました」って挨拶して東京に出て行きましたが、東京に行って半年しないうちに病気になってしまい、それが重い病気（骨肉腫）だったので田舎に帰って親の所に居候して面倒を見て貰っていました。
　高校を卒業した18歳の時に骨肉腫になり足を切断しました。その時から私の「生と死」の闘病生活が始まったのです。当時は制癌剤が無いから癌がどんどん転移していくわけですよね。

複製や写真では味わえない本物の迫力

発病してから私の人生と人生観は大きく変わりました。 当時、私は物を作ることが好きで、特に建築が大好きでしたから将来は建築の設計士になって身を立てられればと思っていました。そのため長姫（長野県立長姫高等学校）の建築科で学びました。病気になっても設計士になる希望は持ち続けましたが、20歳の時に病気が再発して諦めました。

再発の時、東京にいた私は外来受診で慶應病院へ行ったのですが、運良く、いい先生に巡り会う事ができました。その先生は「骨肉腫は、この病院では今までに百数十例扱って、そのうち数人が生き延びているから君も頑張りなさい」と励ましてくれました。生存できる確率は僅かに数%です。でも可能性があるから頑張なさいと励ましてはくれたのですが、実際のところ可能性はほとんどゼロに近いわけです。それで「東京にいても環境的には体に良くないし田舎に帰って好きな事をしなさい」と言われ、故郷に帰ってきたわけです。その時に、「アメリカで、抗癌剤とは言わないが新薬が開発されたからやって見ますか？」と言われて、その新薬を使って治療を受けました。当然、健康保険が適用されませんから治療には沢山のお金が必要になりました。その時父が農業して少しずつ溜めたお金を全部出してくれましてね、そのお陰で延命する事ができたわけです。本当にありがたかったですね。父は昨年なくなりましたが今でも心から感謝しています。

アトリエにて

田山：私達からは想像もできないような厳しい生死の体験をされてきたわけですね。肉体的にも精神的にもたいへんに厳しい状況をくぐり抜けて来られたわけですが、もし差し障りが無ければそこら辺のお話を伺いたいと思います。

小池：癌は「再発したらそれで終わり」というのが当時の常識でした。20歳の時 の再発が私の人生にとっては一番の転機だったと思います。先生に「私は何でもやりますから、その代わりに総てを告知 してください」と、そのようなスタンスで先生と向き合って必死になって治療に努めました。

入院している病棟の私の周りには同じような人達がたくさんいました。昼間は隣の人と普通に話をしているわけですが、夜になって看護婦（看護師）さんがダダッと入って来て、隣のベッドで懸命に何かをやっているんです。私は、カーテン越しにその騒ぎをウトウトとしながら見ているわけですが、やがて寝付いてしまいます。朝、眼が醒めるとそのベッドはきれいに整えられていて、もう次の日には新しい患者が入院して来るわけですね。毎日々そのような状況を見ているのです。明日は我が身かと背筋が寒くなる思いを幾度も体験しました。

入院してこのような体験をしたり、手術をして激痛を味わったり、制癌剤を打って気持ち悪くなり食べたものを全部吐いてしまい幾日も何も食べられなかったり、体力が落ちてきて意識が無くなるような辛い体験を何度もすると「生きているだけでもありがたい。自分の足で歩けるだけでもありがたい。水が飲めるだけでもありがたい」と言う気持ちになりました。一秒一秒体験することが、まるで一生の出来事のように大事に思え、毎日の何気ないことに感動し、知らない内に涙が頬を流れていました。

この時ほど、人間としての「生と死」を理屈ではなく体そのもので感じ、このささやかな命が限りなく尊く愛おしく思えたことはありませんでした。その頃を境に私の中で何かが確実に変わり始めました。この時の入院も運が良くて退院することができました。

そして28歳でまた再々発しましたが、その時には良く効く制癌剤が開発されて、それを何種類か試して、そのおかげで完治することができました。

-そして絵の世界へ-

田山:そのような厳しい現実を体験して、やがて画家として絵の世界に入って行かれるわけですがそのきっかけは何だったのでしょうか。

入院中から思いを描きためたスケッチブック(一部)

小池:私が入院している時に、兄がスケッチブックをもってきてくれたので、病院のベッドで普通の花とか茶碗とかを描いていました。すごく下手な絵でした。(笑)それが絵を描き出すきっかけでした。 当時私は東山魁夷先生の絵が好きで、闘病中に「弟子にしてください」って、手紙を書いたことがあるんですよ。

そしたら奥さんから「主人はとても忙しいので弟子を取ることはできません。」と返事の手紙をいただきました。まあ、いま考えれば弟子になれる訳がなかったのですが。でも、それ以来、東山先生の大きな展覧会があると案内状などを送って頂いたりしていました 。20歳の時の2度目の再発・入院の後、父から「5年間は面倒みてやるけれど後は自分で食っていけ」と言われ、水引の内職などをしてはみましたが、とてもじゃないが食えるほどは稼げません。それにちゃんとした仕事に就こうと思ってもこんな体だから どこも雇ってくれません。「私はそのうち絵を描いて生活していくしかないな」って思い、何とかしてこの道に進もうと考えたわけです。

田山:画家として世に認められ、いまの地位を確立されるまではたいへんなご苦労をされたと思います。画家として認められる方はほんの一握りですからね。大変な難関だと聞いています。小池さん今の画風にたどりつくまでの経過や、最初はどのような絵を描こうと思っていらしたのかを伺いたいと思います。

小池:当時は、まったくの”かけだし画家”ですから、東京の展覧会に出しても落選続きですし、絵だって売れません。自分の好きな世界 を表現した絵で生活出来たらと、いろいろと試行錯誤しました。28歳の時、東京の小さな画廊主催のコンクールで審査員特別賞を受賞しました。それがきっかけで東京の紀伊國屋画廊で初めて個展をした時は、今のような少し透明感のある作品の他に、現代美術のような木や石を貼り付けた作品を展示して、どっちの作品の方が売れるか手応えのある方をやろうと思って様子を見ました。当時、自分が表現できるものは全部出して描き溜めてあった絵を全部展示してみました。その後いろいろな作品を制作して、試行錯誤を繰り返しながら結果的に今の画風になりました。

(1989年)コスモスの神殿

(2004年)生命の声

田山：小池さんが絵を描かれる時に意識されていらっしゃることは何でしょうか。

小池：私が絵を描く時は自分の思想と感性を大切にします。まずは自分の思想と感性を磨き、私が求めている世界に会うとﾋﾞﾋﾞｯときます。どんなに良い題材であっても、自分の波長が合わないと駄目ですね。自分も人様も感動してくれるような絵は描けませんね。

私は日頃からたくさんのスケッチを思いつくままに書き溜めておきます。次の絵はどんな絵を描こうかと考える時、その中から自分の人生で残しておきたいと切に思う作品を選び描きます。上手な人はたくさんいます。自分は何を描きたいか、確信的なものをちゃんと捉えて描かないと駄目ですね。描写だけがいくら巧くても、訴えるものが何もないと駄目だと思います。

作品が完成したら、作品に合った額に入れたいので額も自分で作ります。しかし最近は時間がありませんから小さな額は外注で作っています。

私は癌が再発した時点で、もうそう長くは生きられないなと感じていましたから、「このままではとても死にきれない！」という思いもあり、死ぬまでに少しでもこの世の真理とか、宇宙のこと、自然のこと、人間のこと、自分のこと、自分はどうして生まれて来たのか、絵とは何か、私は何故絵を描くのか等々・・少しでも知りたくて。まあ、当時の青年としては宇宙や自分の存在意義を、絵や文字を通して確認したかったのですね。

今でも絵を描くときは、闘病生活の頃に知りたいと思った宇宙の真理や自分の存在意義等を考えて描いています。人間の価値観は時代と共にその時々で大きく変わります。しかし宇宙の存在自体、真理は全く変わらないですね。そういうものを表現したいという気持ちが強くあります。そして生命ある限り、元気に絵を描き続けて行きたいという気持、祈りを大切にしたいと思っています。

作品はパソコンで管理

アトリエ、すばらしい作品はここで生まれる

田山：足の切断という現実、障害者として大きなハンディを背負っての自立、画家としての地位の確立と、さぞかしたいへんだったと思います。

小池：20代は絵具代にも事欠くような生活の中で、生活の自立もしなければいけませんから本当に必死でした。やっと絵が売れるようになって、30代は本当に必死になって稼ぎましたよ。そして 40 歳の時にここに家を建てることができました。

私は三男ですから、ここじゃなく他の所に家を建てようと思っていたのですが、両親も老いてきていた時期ですし、特に母が弱ってきていましたから、10年近くもさんざんお世話になって、今ここで両親を置いて出ていくのも忍びないなぁと思っていました。ちょうどその時期、この土地が土盛りして空地になっていたものですから、父に「ここを私にちょうだい」と頼んでこの土地を貰って家を建てたわけです。そして父と母がここに隠居する形で一緒に暮らしてきました。

田山:癌を宣告され、たいへん厳しい闘病生活をされ、また、生きる為にかなり厳しい人生を歩まれて来られたわけですが、それはまさに自分自身との闘いでもあったわけですね 。挫折の中で、僅かな希望を見つけようとさぞかしたいへんな思いをされましたね。つらい時によく精神的に持ちましたね。

小池:そうですね。人間は年取ってくれば癌になる人が多くなると思いますが、それでもきついと思いますよ。癌との戦いは生死をかけた戦いですから 、若い時はなおさらですね。特に足を切断した時はいろいろな意味で辛かったし痛かったですね。今は背中から入れる麻酔があるから痛みも軽減されるみたいですが、当時はそのような麻酔はありませんから、モルヒネを腕に直接打つわけです。打つとパーと花園にいるような気分になって、スーと痛みがとれてくるんですよ。でも長くは続かない。一週間続けて打っていたら幻覚症状が現れて天井がぐるぐる回ったりしてね。だからモルヒネを打つのが怖くなりました。先生もそれを見ていて「危ないからこれ以上は止めましょう」と、座薬に切り替えたりしました。手術して癌をいじると癌は体中に飛ぶんです。落ち着くとすぐに抗癌剤治療が始まります。多くの人から、「よく我慢できましたね！」って言われます。骨肉腫はほとんどが 10 代の青少年に発病します。それで荒れる子も多いんですよ。

（1990年）母子像

（1997年）華

田山:人間は辛い時や弱った時など、逆境に置かれると信仰にすがることが多いですね。小池さんはどうでしたか。

小池:闘病生活の時、哲学、思想、宗教等の本を必死で読みました。お寺や教会に行って和尚さんや牧師さんに、宇宙の存在や自分の存在意義、人間にとっての生・死、人間の生き方について等必死で問いました。でも、皆「私にそんな事を尋ねられても・・・」、「私に解るわけがない・・」と。その代わり昔の高僧がこのような本を書いているから読みなさいと貸してくれるわけです。それを必死になって読みました。不思議なことに必死になって読んでいると、難解な内容も自分の闘病生活の体験と重なって少しずつですが解るようになってくるのです。ただ、自分なりの解釈ですから 、それ自体が正しいのかどうかは今もってわかりません。

田山:比叡山の修行に「千日回峯行」があります。荒行ですね。彼ら修行僧は命をかけて修行しているわけです。腰に差した短刀は、もし失敗したらその場で自ら命を絶つという意思表示の表れだとも言われています。その「千日回峯行」を二度達成した高僧の方は、修行中に意識朦朧となりながらも、線香をじっと見ていたら、小さな線香の灰が落ちる時、「ドサッ！」と、とても大きな音に聴こえ、そしてスローモーションのように崩れ落ちていく様が目に映ったという 体験をされていますね。修行中は五感が研ぎ澄まされていき、そのような体験をされる方がいらっしゃいますね。 集中力が異常に高まるのでしょうかね。眠っていた能力が異常な体験をすることで表に出てくるのでしょうか。

小池：今思うと、私の闘病生活の体験は修行でいう荒行に近かったのかも知れません。本来はお寺などに入っていろいろな事を順序だって修行して体得するのでしょうが、私の場合、方法は全く違いますがそれに近いことを学習したのかも知れません。

私達日本人は学校や社会で仏教や剣道・柔道・華道・茶道など、手段は違うけどみんなその「道」を通して、人として大切なことを学んでいるのだと思います。手段は違っても目指しているものは、みんな同じだと思います。宇宙の真理を知り、その中で人間としての正しい生き方を学び実践する。自分に負けずに人間として正しく生きて行く道ですね。

私はいろいろな面でまだまだです。命ある限り人生を通して、絵や文章を通して私が感じる宇宙の真理や神秘、人間として大切に思うことを求め続け、精一杯表現してゆきたいと思っています。

＊作品の掲載につきましては小池氏の承認をいただきました

※この記事は、長野県下伊那地方事務所のホームページへ平成 25 年8月 29 日まで掲載されていました。